

世界の破壊者のヒーローアカデミア

白滝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界中の人間の約8割が超常の異能“個性”を宿しており、
毎日、超常の異能を用いて社会に被害を与える犯罪者・敵ライアンと敵を捕らえるために日夜働く国家公務員、ヒーローが戦う世界。

この世界に1人の正しい時間とは別の時間の世界の破壊者がたどり着く。
これは旅の果てにたどり着いた世界で世界の破壊者が英雄を目指す物語だ。

目次

来訪者D／英雄の兆

1

来訪者D／英雄の兆

街の少し入り組んだ路地裏の奥にあるもはや使われていないことが一目でわかるような廃工場。そこは現代社会の犯罪の大多数を占める個性を使った犯罪者の溜まり場と化しており、毎日のように非合法の武器や薬品と言ったものが取引されていた。しかし、そのような敵を取り締まるヒーローは来ない。通報がないためか、見逃しているのかは不明だが、ある種の敵にとつての安置であり巣窟というほかない場所なのは確かだった。中は下卑た笑いを浮かべ、酒を飲み、薬を服用し暴れ回る無法者が毎日飽き足らず騒いでいた。ただ、まあ……街の奥とはいえ、街の中にあるのだ。当然、偶然だったり街を探索していたり、様々な理由があつて紛れ込んでしまう不幸な人間だっている。そういう人間は家に帰れないのも当然だった。そして、同じように紛れ込んでしまった少年一人。外見は中学生ぐらいで緑色のボサボサな髪とそばかすが特徴的な見るからに臆病という他ない挙動の少年。名を緑谷出久という。

「あ………(っ)は？」

あたりを見渡して緑谷は呟く。学校でいつものように彼の幼馴染に揶揄され、行く当てもなく——家に帰る、という手段もあるのだが——彷徨っており、文字通り流れて来

てしまった、といったところだろうか。周囲を見渡せば過去に工業地帯であった工場の残骸しか見当たらずつとこの街に住んでいながらも見たことのない風景であることがわかる。

（ここは……廃れた工場跡？でもそれにしては人の気配が……）

困惑しながらも考えつつ歩みを進める。戻る、という選択肢もあるが生憎どうやってここに来たのかわからない以上、戻つても迷うだけだし人の気配もあるんだから道案内でも頼めないだろうかだなんて考えつつ人の気配があつた方向へ進む。この廃工場を知る人間からすれば愚かさえ見えるだろう。当然だ。学生は個性を使う権利さえ持たない。ましてや多対一で勝てる戦闘能力など有している方がまれだ。加えて、緑谷は無個性。わかりやすいほどに無力だった。

ギイ……と重い金属扉が音を立てて開く。だが騒ぎ回る敵からすれば雑音の1つに過ぎず、特に気づかれることなく中を見ることができた。中には空き缶や空き瓶、使われた形跡のある薬の袋——それも市販品ではない——だったり落ちていて、中心に置いてある大きな机には縁が鉄を使って造られたのであろう黒いトランクケースが開いたままおいてあり、その中には歪にさえ見えるUSBのようなものが入っていた。

「ヒッ……」

緑谷はその衝撃にも恐怖にも等しい感情と中の肌で感じる異常な空気後ろに気圧

され、転んでしまう。不幸だった、と言わざるを得ないのは転んだことで大きな刺激を背中が一身に受け空気の入っていない音が漏れた後に雷声が出てしまったことか。

「ア、ツ……」

急に外から聞いたこともない人間の張り上げたような声が聞こえたら警戒だつてする。それが常日頃からヒーローと戦っているこの敵からすれば当然のことだ。そして、違法行為だろうが何であろうが罪悪感などないといわんばかりに行動に移す敵。緑谷に死の危機が迫っているのは明らかだった。それを理解している緑谷は重い体を無理やり動かし、後退する。とはいえ足もろくに動かないほどに体が強張っている状態だ。そう動けやしなかった。そして、そこに追いついた敵の一人が血走った眼で緑谷を睨み付ける。

「チツ……テメエ、なんでこんなところにいんだあ？」

ドスの効いた声。それにより緑谷は尚一層震え上がる。そして後ろから出てきた他の敵も緑谷を見て、最初に出てきた敵に耳打ちをする。要はここで殺してやればいいのではないか、ということだ。それが聞こえない緑谷でも危害を加えられるであろう事は理解できた。最初に出てきた敵は嘲弄するような嗤いを浮かべ先ほど緑谷が見たUS Bのようなもの——ガイアメモリと呼ばれる——の中で紅かったものを構え、起動する。

M_マ
A_グ
G_マ
M_マ

機械的な音が鳴り、男は生体コネクタに端子部分を押し込む。するとメモリ自体が体に取り込まれて男は異形そのもののような怪人に変化する。荒れ狂う火砕流のような見た目のそれは文字通りの化け物だった。そしてこの怪人、マグマドーパントの力によつて周囲の温度は上昇し、マグマドーパントは火の玉のようなものを創り出して緑谷に向かつて放つ。

——その時だった。

緑谷が目を閉じた瞬間に銀色の幕のようなものが火の玉を消し去り現れたのは。緑谷もマグマドーパントも知りえぬ情報ではあるがこれはオーロラカーテンと呼ばれる能力であり現象。そしてこの現象がある、ということはこれを通りこの世界のこの場所に現れる人間がいることの証左。

事実、幕の中からはブレザーのような黒い学生服にマゼンタのセーターを着てマゼンタカラーの2眼カメラを首から下げた高身長少年が現れた。

「なるほど、ドーパントか。だが、Wの世界は既に訪れた後だ。ここにも財団Xがいるのか?」

少年の独り言に困惑したマグマドーパントは激昂したように叫ぶ。

「お、おお、お前っ！何者だ!？」

「デイケイドは相手がドーパントであることぐらい理解している。そのため、もう一枚別のカードを取り出し、ドライバーのバックルを開いた。」

「ドーパントにはこれだな」

KAMEN RIDE

カードが読み込まれ、姿は瞬く間にマゼンタ色の体から緑と紫に近い黒で構成されたこの世界にも存在する風とエコの街、風都のヒーローであり仮面ライダー、仮面ライダーWの基本形態であるサイクロンジョーカーに変わる。それに対しマグマドーパントは気圧されつつも火の玉を放ってくるがデイケイドはライドブックカーをソードモードにして火球を切り裂いていく。本来であれば変身したライダーにあった行動を行うが今回は緑谷出久という守るべき人間がすぐ後ろにいるために自重しつつ立ち回る。火球を薙ぎ払い、廃工場の上へと移動するとそれに対抗するようにマグマドーパントが付いてくるのが見えた。

(ここら辺で変えておくか)

100mを5.2秒で駆けるWの速度を生かし、現場から離れつつデイケイドはライドブックカーをソードモードからブックモードに戻しカードを取り出す。描かれているライダーは色の変ったW……つまり、フォームライドだ。カードを再びバックルに入

れ、機械的な音声流れだす。

FOAM RIDE

W LUNA JOKER

忽ち姿は緑と紫から黄と紫へと変わり、瞬時にマグマドーパントにルナメモリと同様の効果ともいえる変幻自在の手足を利用して攻撃を仕掛ける。マグマドーパントは負けじと火球を多数放出するが、どの火球も伸縮変幻自在と化して腕にかき消されていく。焦ったようなマグマドーパントは体中を覆う炎のようなものから高熱の熱波を放出してくる。が、決定打たりえるどころか聞いていないかのようにデイケイドはいなしでマグマドーパントに近づいていく。もう目前となったところで飛び上がり、空中にいたる間に3度相手を蹴る、という器用なことをやってのけて着地、ジョーカーがベースになっっている左腕を軸に回転して右腕でパンチを鳩尾、肩、顔と殴ってバランスを崩させて追撃。攻撃させる暇すら与えずに10mは優にあるであろう高さまで蹴り上げ、ルナジョーカーからサイクロンジョーカーにフォームを戻して黄色いカードをバツクルを開いてドライバーにいれる。

「これで仕舞いだ」

FINAL ATTACK RIDE

サイクロンメモリの効果と同様の効果が発揮され、デイクイドは空中に蹴り上げられたマグマドーパントよりも高いところまで移動し足にエネルギーが収束されていく。ファイナルアタック、その名にふさわしい威圧とエネルギーなのが肌で分かるほど強烈な風が吹き荒れている。

突然かもしれないが、メモリブレイクと呼ばれるドーパントと化した人間をガイアメモリを破壊して体の外に出すことで使用者自体の死を回避する、というドーパントの倒し方があるのだが、このメモリブレイクで必要なのはドーパントと同じくガイアメモリを使用したマキシマムドライブという名のガイアメモリを使用するライダー固有の必殺技でありメモリの能力を完全に発揮することができる状態ではかできないのだ。そのため、ガイアメモリを使用していないデイクイドであれば本来はメモリブレイクを行うことはできない。だが、今回のような事態であれば異なる。デイクイドは全く別の仮面ライダーに変身し、その能力を行使できる。つまり、Wでのファイナルアタックライド、ということはWの必殺技の一つであるジョーカーのマキシマムドライブで放たれる仮面ライダーWが最初に使用した必殺技、ジョーカーエクストリームを使用できる、ということだ。

空中で両足を前に突き出すようにしてキックを構え、デイクイドはマグマドーパントに向かって蹴りを放つ。空中で縦に真っ二つに割れて、サイクロンとジョーカーによる

二連撃の蹴りだ。これを食らったマグマドールパントは耐えられるはずもなく爆散し、敵の一人であった男とマグマガイアメモリに分離して男は気を失って倒れ、ガイアメモリは空中で碎け散る。

「これで終わりか」

デイクイドは終わったことを確認し、警察に連絡だけして変身を解き、緑谷のいた場所へと向かう。彼が逃げられたか、あるいは彼が怪我を負っていないかの確認だ。そもそも少し別の場所へ誘導したとはいえ、最初にいた場所からはそう離れておらずデイクイド自身が方向音痴でもないため先居た場所へたどり着くのにそう時間はかからなかった。少年はマグマドールパントと戦い始めたあたりから敵たちが逃げ始めていたのはわかっていたため廃工場内はもぬけの殻であることは予想できており、事実そうであったことを確認して一息ついて扉から少し歩いたところに隠れている緑谷を発見する。足腰は震えているが立ててはいるのである程度は緊張は収まったのだろうと考えつつ緑谷に声をかける。緑谷もそれに気づいて一瞬身震いするも少年の方を向いた。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫……えっと、君は？」

身の知らぬ恐怖による緊張とはまた違う緊張を感じているのかはわからないが緑谷の震えは収まっていなかった。結論から言えば見たことのないヒーローの活躍を見て

安心した後であるため彼の持つヒーローオタクとでも言える脳がフル稼働を始めていたのだ。そんなことは露知らぬ少年は名前でも聞かれているのだろうと考え口を開く。

「門矢司。通りすがりの仮面ライダーだ」

門矢司、そう名乗った少年は緑谷が口を開こうとしていることに気づきながらも背を向け、歩き出す。そしてオーロラカーテンの中へ消えていき、マグマドールパントと仮面ライダーディケイドの戦いがあつた場所には緑谷だけが残った。

「凄……人だった」

その言葉を最後に緑谷も場を後にする。心の中で熱い情熱のようなものが昂つていくことを心のどこかで理解して、仮面ライダーと名乗った少年に思いを馳せながら。